



福島県各地に、全国から様々な形の応援が寄せられています！そんな頼れる皆さんからのメッセージをお伝えます。

福島へのラブレター



シンガーソングライター
高橋 佳生さん
(仙台市在住)

2009年まで13年間、福島でラジオ番組を担当していた僕にとって福島は、第三の故郷です。震災後は、東京や広島の人達が送ってくれた支援物資と僕の歌を持って宮城や福島の避難所を巡りました。驚いたのは子どもたちのパワーです。どんな状況にあってもくたたくのない笑顔で周りを明るくしていました。その笑顔に僕が励まされることも度々ありました。僕の歌に自分の人生や思い、夢、希望、祈りを重ねながら涙されていた皆さんの姿も忘れられません。もうすぐ春です。皆さんが一日も早く美しい故郷と日常を取り戻せるようこれからもお手伝いしていきたいと思っています。冬は必ず春となる。



スポーツジャーナリスト
増田 明美さん
(千葉県出身)

私は福島が大好きなんです。いわきサンシャインマラソンを走った時には大漁旗を掲げて威勢のいい応援をして頂きました。毎年中継でお邪魔する東日本女子駅伝(福島市)ではスタッフやボランティアの方々の温かくて涙もろいお人柄に触れています。

福島市飯野の仮設住宅を訪れた時、一緒に体操していたおばあちゃんが「ここに来て毎日歩いてたら、腰痛が治ったわ」と。やはりどんな時でも前向きな言葉を発することが大切ですね。お互いしっかり前を見て、一步一步進んでいきましょう。

リレーエッセイ

東日本大震災と私たちの課題 ～温かなご支援に感謝しつつ～

社会福祉法人 青葉学園 園長
神戸 信行

昨年3月11日の東日本大震災から間もなく1年になりますが、津波による甚大な被害の深刻さに言葉を失ったまま、心は痛んでやみません。そして、福島第一原子力発電所の事故による放射能汚染と風評被害の悲劇は、今も続いています。

青葉学園は、家庭で暮らすことができない子どもたちが暮らす児童養護施設です。放射線が子どもに与える被害は、特に深刻なものと知り、入所する60名の子どもたちの生活と健康を守るために、今日まで緊張した日々を送ってきました。それは、子どものいる家庭でも同じだと思います。除染をはじめ将来への見通しが持てない中で、気が滅入ることもありましたが、それにもかかわらず、希望を失わずに今日まで歩めたのは、近隣をはじめ地域の方々、さらに多くのボランティアの方々のご支援があったからです。

原発事故に関しては、コミュニティ全体が分散し現在も避難生活をしている方々をはじめ県民全員が被害者です。私たちの美しい郷土が、放射能に「汚染」されている。その事実、私たちは怒りや悲しみを覚えるとともに、私たちの自尊心まで痛めます。

さらに危惧されるのは、私たちの置かれた状況や考え方の違いから人間関係に深い溝が生まれることです。例えば、戸外での子どもの活動を可とする親もいれば、不可とする親がいる。自主避難する家族があれば、避難しない家族がいる。損害賠償の対象地域とそうでない地域がある等々の現実です。そこに暮らす人々が一体感を持って暮らしていた地域の間人間関係が、震災後の様々な状況下で分断されてしまうことを恐れます。そのような中で、私たちは県下で活動される多くのボランティアの方々の姿から人と人との絆の大切さを身に染みて感じさせられ、支えられ、励まされています。あらためて、私たちが力を合わせて福島県の復興に取り組みたいと思います。

多くの被災地で「兎追いしかの山、小鮒釣りしかの川」で始まる唱歌「ふるさと」を歌う光景が見られました。故郷とは、父母をはじめ地域の方々に見守られ、友人とともに安心して「子ども」を生きることができたところです。人は、そこで成長し、志を抱いて自立の道を歩むことができるのでしょ。今も震災後の深刻な被害に苦しむ福島県ですが、ボランティアの方々も加わっていただきながら、新たな「ふるさと」の再生を目指したいと切に願わずにはいられません。

Let's Volunteer! ボランティア活動のすすめ

1995年の阪神・淡路大震災には延べ130万を超えるボランティアが活動したと言われていますが、その後の大地震や豪雨水害などにおいても、そして今回の東日本大震災においても、全国あるいは海外からたくさんのボランティアが被災地に駆けつけてくれました。発災直後から完全装備でやってきてくれる頼もしいボランティアたち。そんな実体験やマスコミなどの映像を通して、被災されたみなさんのなかでは、ボランティアって遠くから来てくれるもの、という印象を持っている方も少なくないのではないのでしょうか。

「ボランティア」というとなにかちょっと構えたイメージや特別な行為のようにも思われがちですが、ボランティアはそもそも、だれでも、いつでも、気づいたところから気軽に始めることができる自発的な行い。ご近所同士の助け合いや地域をよくするための住民活動の多くも含まれますし、募金や物品を寄付したり、自分の趣味や特技を活かして他人や自分の住む地域のために貢献したりと、地域社会の一員として「当たりまえ」「お互いさま」と思っている活動の中にも小さなボランティアをたくさん見つけることができます。

ある調査によると、ボランティア活動で得られたことは？との問いに、第1位は「多くの仲間ができた」、第2位は「活動自体の楽しさ」との回答がありました。活動を通じて、新しい仲間に出会ったり、気持ちのハリができたりと、自分自身を力づけるきっかけにもなっているようです。春に向けて、あなたも何か始めてみませんか？

ボランティア活動を始めてみたいと思ったら
あなたのまちの**社会福祉協議会(ボランティアセンター)**へご相談ください

こんにちは、生活支援相談員です！

南相馬市社会福祉協議会

平成24年元旦、穏やかな新年を迎えました。南相馬市社協では、昨年8月に生活支援相談員が13名配置されました。仮設住宅への入居が5月から開始され、津波被害、原発事故、そして慣れない土地での不安の中、被災者の想いは計り知れないものでした。

そこで、コミュニティづくりのため6月下旬から集会所に於いてサロンを開始し、8月からの活動に繋ぐことができました。仮設巡回訪問は約2700戸、被災者の気持ちに寄り添いながら、関係機関と連携を図り、毎日支援活動に取り組んでおります。現在、原町区牛越に建設中の300戸の仮設住宅は、3月から入居予定であり、さらに私たちの役割が重要となります。

また、借り上げ住宅には、情報不足もあり

行き届いた支援ができない状況でしたが、自主的に立ち上がろうとする入居者と共に支援の輪を広げていきたいと思っております。



前列右から高野美紀、黒木洋子、打田千晶、福島道子 中央列右から福島祐子、高野和子、館内咲子 後列右から鈴木信茂、藤原隆司、遠藤英、大堀浩、境原祥友、秩父重弘

編集後記

冬来たりなば春遠からじです。…たくさんの方々に支えて頂き、今があることに感謝しています。福島春に向かってがんばっていきましょう！ (穴戸博子)

最新情報はホームページをご覧ください！

<http://www.pref-f-svc.org>

5カ国語(English, Chinese, Korean, Portuguese, Tagalog)で翻訳の「はあふるふくしま 別冊」がご覧になれます。 協力:多言語センターFACIL



がんばろう、福島。

次号は2月20日発行です。